

「Happy」を分け合う

能登町立松波中学校 3年 脇田 麻結

過日、学校のタブレットで税について友達と調べていた時、「税金の使い道」とかかれた図の中に「海外支援」という語句を見つけた。気になって調べてみると、海外支援とは開発途上国の自立の支援のため、その国に資金を送ることだということが分かった。

すると友達は歓喜の声を上げた。見返りを求めず他国のために資金を送る我国日本に大きな誇りと感心を受けたという。対して私は誇りも感心も感じる事ができず、なんともいえない気持ちだった。なぜなら、社会科の授業で税について学んだ時、日本が多額の借金をしているため国民から税金を集め、その一部を借金返済にあてているときいたからだ。自国の借金返済も危ういのに関国に援助できる金があるのか気になったし、他国に援助していることで借金が一向に返済されず、だらだらと自国の税金を高くしているのかと思うと多少の苛立ちを覚えた。

けれどもその多少の苛立ちは一通の手紙によって恥じらいへと変わるのである。

その一通の手紙とは、アフリカに住むある男の子が私の父にあてた手紙である。父は、ワールド・ビジョンという貧困と不公正を克服する活動を行う国際NGOに参加していて、一日百五〇円の寄付をしている。手紙の差出人の男の子は父が支援したチャイルドであった。手紙を読む父の顔があまりにも嬉しそうだったため、私も中身を見せてもらうことにした。まだ学校で習っていない英単語や文章構成で、かいてあることはほとんど分からなかったものの、「I am very happy」という文をたくさん見つけた。私はこの時、とても温かい気持ちになった。

私は以前、自分の金の出費と、自国の借金返済のことしか考えていなかった。それは自己中心的な考えだったと恥ずかしく思う。私たち一人一人の少ないお金を必要としている人は世界中にたくさんいる。その人たちのためにだれでも力になれることができる海外支援は素晴らしいことだと思う。

もちろん、日本であつめた税を全て海外支援にあてているわけではない。どこかのだれかが納めてくれた税金で私は今、たくさんの教科書を持ち、勉強に励んでいる。反対に、私が納めた税金の一部がどこかの町の橋や道路を造っているかもしれない。

このように、税は国や地域をこえて、人と人とを結びつけるはたらきがある。また、そこに温かな交流を生み出す。

私たち人間が豊かな生活を送るには、納税は必要な義務である。自分のため、人のために納税を続けていきたい。